

●2017 年度 ESG 説明会(富士通の環境の取り組み)質疑応答議事録

日時 : 2018 年 3 月 20 日 (火) 16 : 00~17 : 00
場所 : 富士通汐留本社 6 階ユーザコミュニティサロン
説明者 : 環境・CSR 本部 本部長 金光 英之
環境企画統括部 統括部長 前沢 夕夏
環境技術統括部 統括部長 濱川 雅之

■質問者 A

Q. 環境に関する取り組みを進めていくと、コスト面で富士通の業績に悪影響になると感じますが、事業部に対して製品開発の際などにどう説明をしているのでしょうか。

A. (金光) 環境のコストは 2 種類あります。1 つはリスク回避、コンプライアンス遵守のコストです。これは単純にコストとして考える必要があります。もう 1 つはビジネスのためのコストです。世の中で省エネのニーズが高まっている中、ソリューションについても省エネが促進できるようなものが求められており、そのマーケットは非常に広がっています。

特に SDGs については、社会課題として非常に大きいものなのであり、2030 年には約 12 兆ドルの市場規模があると言われていています。今後、守りの環境活動が一段落したら、攻めの、ビジネスに即した環境活動を展開していく必要があると思っています。

なお、事業部の中で環境をどう推進していくかですが、数年前はコンプライアンス遵守のためのコストがかかっており、コストが高いという認識はありました。しかし、世の中で温暖化などの社会課題がクローズアップされ、そこに解決策を求め始めてきたから、非常にビジネス的な視点で取り組む事業部は多くなっています。我々も積極的に情報提供して理解してもらっています。今は随分方針が変わってきました。

Q. 富士通は海外の ICT 企業と比較すると、再生可能エネルギーの使用率が 7.5% と大きく後れを取っていますが、国内の外部評価では高い評価をもらえているとのことで、少しギャップを感じます。富士通が定量的に目指している姿はどの辺りになりますか。

A. (金光) 国内では、制度やサービス面で再生可能エネルギーの利用が難しいことが原因の 1 つです。また、我々も国内にいますので、どうしても視点が国内に向き、海外は良いが、という言い訳があります。しかし、昨年、気候変動枠組条約締約国会議 (COP23) に参加して感じたことですが、できることからアクションをする必要があると痛感しました。そこで、海外で利用できるサービス、コストの安い電力を導入することを中心に推進しています。これによってブランドイメージを高めるほか、安くなりつつある電力を採用することでコスト競争力も高めていくことを同時に行っていきます。

(補足 : 海外では再エネ電力価格が grid 価格より安く提供されており、各種制度・サービスが充実していますので、海外企業は再エネ利用率の面で有利な状況にあります。弊社においても海外を中心に積極的に再エネ導入を進めています。)

■質問者 B

Q. “C&E Vision 2050” 3 つの柱で「緩和」と「適応」について具体的にどのようなことを行っていますか。

A. (金光) 「緩和」は、スマートモビリティや都市監視の事例にあるように、交通渋滞によ

る二酸化炭素排出量や、大気汚染、呼吸疾病などに繋がる物質の発生量を抑えていくことを目指して取り組んでいます。「適応」は、事例に挙げている地球規模の気象予測のような気候変動による影響への対応。例えば防災・減災の分野では、地球観測データを解析し、これに基づいて堤防を作ったり、高潮に関する都市計画を作ったりする。このように情報を活用して貢献することを目指して取り組んでいます。

Q. 2050 年で CO₂ ゼロという目標については理解しましたが、短期的な目標、KPI について教えてください。

A. (金光) 2030 年に 33%削減の目標を持っています。年あたり約 2%を目標に、再生可能エネルギーの利用や様々なサービスを利用しながら達成していきたいと考えています。

■質問者 C

Q. 富士通は先駆的に ESG 説明会を開催しており、取り組みが進んでいる印象ですが、環境の部分で自社の取組みにどのような課題があると思いますか。

A. (金光) 2 年前に SDGs というキーワードが出てきて、皆がそれにどう取り組むかという考えが広がってきています。SDGs を考えるとき、2 つの視点があると思っています。1 つは SDGs をビジネスのプロモーションに使う動きです。富士通でも SDGs の中の重点課題からいくつか課題を選び、それについてのソリューションを考えていこうとする機運が高まっています。もう一つは SDGs の内面的な利用です。つまり自分達の活動をどう正していくかです。例えば、健康な社会を実現するために、製品の中に有害な化学物質が含有しないようにしていく、温暖化防止のためにクリーンな製品を作る、などです。しかし、ビジネスだけが先行して、内側がいい加減ではいけません。両軸で回していくことが必要です。今はこの考えが段々と浸透したおかげで富士通の中では違和感なく、推進できています。

環境面での課題ですが、この 2 年間、色々な外部評価含めて、環境の取り組みは非常にうまくいっていると思っています。課題を強いてあげれば草の根活動です。田中社長自らがトップダウンで号令をかけてくれましたが、それを現場に定着させるために、やはり地道な活動を通じて、社員一人一人を教育していくことが重要です。一人一人がどういう思いで環境について取り組むかが非常に大事です。教育の資料についても、ストーリー性を持たせ、社会課題とビジネスの関連付けを意識してきました。

Q. ビジネスを推進する上での ESG の活用の中で、ICT のフル活用で CO₂ 排出量を 20%カットできるというご説明がありましたが、こういったビジネスは、富士通の全事業の中である程度の規模を占めるようになるかと期待していいのでしょうか。

しかし、現状はそこまで大きな領域ではないのでしょうか。

A. (金光) SDGs の社会課題のビジネス規模は、2030 年で約 12 兆ドルの市場規模があると言われています。富士通はグローバルに 2.2%のビジネスを推進中です。この分野での可能性は大きく、富士通にも追い風だと思っています。

全事業の中での規模ですが、定義が大変難しいです。例えば、製品はすべてグリーン化していますので、環境製品という意味では全部入ります。定義の仕方次第だと考えます。

■質問者D

Q. CO₂排出量について、2016 年度実績 134.5 万 t に対して今年度はどのくらいになりそうですか。また国内でのポジショニングはどのくらいに位置づけられるのでしょうか。

A. (濱川) 約 125 万 t を見込んでいます。日本経済新聞社環境経営度調査の分析では、削減量という点で、最上位企業と比べると海外拠点での自助努力が必要な部分もあり、必ずしもトップとは言えません。

(金光) 排出量そのものは、例えば半導体ビジネスを持っている工場では大きく、ビジネス領域により変わってくるので単純に比較するのは難しいと思っています。当社の場合、過去 3 年を見ると経済産業省の省エネ法で定めている目標値 1% (原単位) に対して約 2.7% (絶対量) を削減できており、良い形で結果を出せていると考えています。ただ、当社は先行して省エネに取り組んできたので、段々と余地は少なくなってきたと思っています。今後、再エネの利用についても考えていくべき課題だと考えています。

Q. スマートファクトリーやモビリティ、都市監視などといった企業の生産性向上に資するものであれば何らかの改善につながるとは思いますが、最終的に企業業績につながる KPI やアイデアがあるのでしょうか。

A. (金光) 環境活動については具体的な KPI は有していませんが、例えば古いハードウェア製品を新しい ICT 機器に取り換えることで世の中を良くしていこうという視点では、その売上等を上げていくという漠然とした目標はあります。

■質問者E

Q. 日経のランキングが電子・電機分野では 1 位ですが、全体では 12 位で、さらに前回のスコアからも落ちたとのことですが、これは他社の取り組みがより一層改善されたために、相対的に順位を落とされたのでしょうか、現状認識を教えてください。

A. (金光) 日経ランキングに入ってくる企業は増えており、トップを目指して競争も激化しています。特に住宅メーカーや飲料メーカーなどのビジネスとマッチングした業界が環境を売り文句として伸びてきています。電機メーカーは先行して良いポジションにいましたが、新興勢力の新しい視点での取り組みからすると後手にいるように見えます。富士通は 12 位ですが、トップとのスコアのポイントの差は昨年よりも縮まっています。しかしトップ争いが非常に熾烈で、1 つ 1 つの活動のアピールをどう強化していくかがポイントになります。

なお、トップ 5 と比較して、富士通のどこが弱かったかということ、海外拠点の水の使用量の管理や CO₂ の管理が弱いということところです。また、資源循環系で富士通も色々な活動はしているのですが、複写機メーカーは複写機を回収して処理するという点で非常に高いポイントを取っています。富士通のビジネスモデルである卸や量販店を通じて売るといったビジネスモデルとの差があり、埋め切れていないと思っています。今年はサプライチェーンを含めて、海外拠点も 1 つの注目施策として実行し、18 年度以降は高いポジションを目指していきます。

Q. プレゼン資料 11 ページのスーパーコンピュータの消費電力とパフォーマンスの改善について、具体的にどのような技術革新によって単位当たりの消費電力を改善したのか教えてください。また、他社と比較して、より環境にやさしいものなのかも教えてください。

い。

- A. (金光) 環境に即してお話しすると、スーパーコンピュータなので空冷技術がポイントになります。富士通は液浸から水冷技術まで有しており、それを高効率で使っています。加えて、デバイスの設計技術も重要でそれらを盛り込んで改善を進めています。

■質問者 F

- Q. 人工光合成は富士通の中でどのくらいの実現可能性がありますか。実現した場合、富士通のビジネス上で今後どういった展開が予想できますか。
- A. (金光) 富士通は電極の製造技術に長けており、そこに特化して進めていてユニット化するところまできています。その後のビジネスのあり方は富士通だけでは実現が難しいので、どこかパートナーと組んでやることとなります。

■質問者 G

- Q. 今回、海外企業との比較をされていましたが、ESG のイニシアティブで先進的な会社の中には取締役レベルで E、S、G のリスク管理の枠組みを取り入れ、目標の達成度合いに応じてインセンティブにも反映するといった取り組みをされていますが、富士通の場合はどのような取り組みを行っていますか。
- A. (金光) 経営トップの関与という観点では、社長の田中をトップにした環境経営委員会があり、さらに課題別に 9 つの委員会を設置して進捗管理をしております。4 月から当社の副会長になる佐々木が環境・CSR のトップになることは、富士通の環境・CSR 活動が非常に重要であることを意味しており、大きな枠組みで活動を活性化していきます。(前沢) インセンティブについては、海外拠点も含めた富士通グループ全体で、環境貢献に関する表彰制度があります。社長表彰となる中央表彰まで上がるもので、年に 1 回実施しています。ダイレクトに給与には反映されませんが、表彰によるインセンティブ制度は持っています。

以 上